「意見が違っても人格を受け入れ合う」

ローマ１４：１－５

堀田修一　２４・９・１

序：広い視野と終末的な響きをもった 13 章の勧めが、14 章に入ると、きわめて現実的なさばき合いの戒めへと変わる。終末的危機の自覚が、再臨の主を待ち望む教会内の霊的な一致を求めることにつながる。当時のローマ教会の中には、律法主義的傾向とそれを克服しようとするグループがあり、互いに対立し、さばき合っていた。パウロは、それぞれの立場の考えのよしあしには言及することはせず、むしろ、そのあり方（人格を受け入れ合う）について語り、キリスト者の霊的な一致を確立しようとします。

Ⅰ　違う意見の人の人格を受け入れ合う

１.「信仰の弱い人を受け入れなさい。その意見をさばいてはいけません」：１。パウロは、律法主義的な傾向を克服しようとする自由派のキリスト者たちに、「あなたがたは信仰の弱い人（の人格）を受け入れなさい。その意見をさばいてはいけません」と語ります。「信仰の弱い人」とは、律法的な考え方（聖書が明確に語っていないことに固執する考え）にとらわれている人たちの事です。彼らは肉を食べることをためらい、特定の宗教的な日を守ることにこだわっていた。パウロは、信仰による理解や考え方に違いがあっても、まず心を開いて彼ら（の人格）を受け入れなさいと勧めます。

２.「ある人は何を食べてもよいと信じていますが、弱い人は野菜しか食べません」：２。当時、偶像に供えられた動物の肉が一般に市販されていた肉の中に混ぜて売られていた。その肉を食べることのよしあしについて、ローマ教会の中に二つの考え方があった。一つは「何でも食べて良いと信じる人」。彼らは、すべてのものは神によって造られたのであり、また偶像の神は実際は実在しないので、偶像に供えられた肉を食べても問題ではないと確信していた。他の立場の人は、偶像に供えられた肉を食べることは偶像礼拝に参与することになると考え、「野菜しか食べるべきでない」と信じていた。

３.「食べる人は食べない人を見下してはいけないし、食べない人も食べる人をさばいてはいけません。神がその人を受け入れてくださったからです」：３。この両派は、それぞれの考え方を主張するだけでなく、相手の考え方を厳しく批判し合っていました。「食べる人」は、自由に動物の肉を食べる人の事。彼らは偶像や宗教的戒律に対して、偶像に供えられたものを食べても問題ないと認識していたので、どんな肉も食べることが出来た。彼らは、それ故に、自由に食べることのできない人を見下していた。私たちも、考え方の違う人を見下してはいけない。「食べない人」とは、偶像に供えられた肉を食べない人のこと。彼らは、まじめな考え方、良心の故に、偶像に供えられた肉が混入している可能性の

ある肉を食べることを拒否していた。そして、肉を食べる人を不真面目で不敬虔な人たちだとさばいて（非難して）いた。パウロは、こちらの人にも「食べる人をさばいてはいけません」と厳しく戒めます。私たちも、人を見下すこととさばく、非難することから守られるように祈りたい。意見の違いがあっても、人格を尊重し受け入れ合いたい。「神がその人を受け入れてくださったからです」。意見、考え方が違っても、人格を受け入れ合う根源的な理由は、神がいのちを与え救われたそれぞれの人、人格を受け入れて下さったという愛と恵みに満ちた事実があるからです。ここで最も強調されているのは「神が」です。神がすでに受け入れておられる人を、どうして罪人であるあなたがたが他人をさばく（自分を神の座に上げてさばき非難する）のかと叱責されています。

４.「他人のしもべをさばくあなたは何者ですか。しもべが立つか倒れるか、それは主人次第です。しかし、しもべは立ちます。主は、彼を立たせることがおできになるからです」：４「他人のしもべ」とは、他人の家の使用人のことです。ここでは、キリストのしもべとされたキリスト者のことを指します。他人の家の使用人をあれこれとさばくことは、まことに非常識な越権行為です。その様な非常識な高ぶった行為をしているあなたは、いったい何者ですかと注意されている。「しもべが立つか倒れるか、それは主人次第です」。このみことばの「主人」は、「主」、主イエス・キリストを意味しています。主は、主のしもべのキリスト者が倒れていても立たせることがおできになるのだから、あなたがたが先走ってさばく必要は少しもない。それは、キリストが主（かしら、恵みと真に満ちた力ある支配者、神）の領域を侵害する思い上がった行為であり、きびしく慎まなければならないことです。聖書に明確に記されていない事で意見が違っても互いの人格を尊重し、それぞれの意見を愛をもって語って良い中で、意見の違う人をさばく（人格を攻撃する）ことは高ぶりの罪です。

５.「ある日を別の日よりも大事だと考える人もいれば、どの日も大事だと考える人もいます。それぞれ自分の心の中で確信を持ちなさい」：５。当時の教会では、食物と同じ問題で、特別な宗教的な日を守ることの問題があった。初代教会の中には、ユダヤ主義的な考え方が根強く残っていました。特別な祭儀的な日や季節を守らなければならないと主張していた（但し、主が日曜日に復活されてからの主日礼拝を大切に守ることは教会全体が大切にしていた）。一方、ユダヤ教に縛られず、主を信じキリスト者になった人々は、旧約聖書の儀式、祭りの日は、主の十字架で成就されたことを知り、ユダヤ主義的に宗教的な儀式や日を守ることが救いの条件となるという考え方に反対した。特に、儀式厳守ではなく、主への信仰による救いという福音の中心の大切さを認識していた。しかしパウロは、食物のときと同じように、その内容にまで立ち入って論議を展開することをしない。「考える」（原語：クリネイ）ということばは「判断する」という意味。現実の問題に対して、同じキリスト者であっても、違った判断をすることは当然なことです。その判断が違うからといって互いにさばき合うことは慎まなければならない。むしろ「それぞれ自分の心の中で確信を持つ事」が大切です。「自分の心の中で」は、「自らの実践的理性的判断において」とも解せることばです。独善的な判断ではなく、実践的理性的な判断の確信を持つこ

とこそ、自分と他者に対して責任を持った生き方が出来る第一歩です。それぞれ自分の心に確信、考え、意見があることを認め合う心がある時に、無責任な批判をし合うことから守られ、真実な意見を出し合い、意見が違っても人格を大切にし合う時に相互理解、主にある一致が生まれて来ます。

Ⅱ　私たちの実生活への適用。私たちは祈りつつ自分の考え、意見、確信を心の中で持ちましょう。違う意見の人を非難せず、神が受け入れられた人格を受け入れ合い理解し合いましょう。主が「あなたがたを受け入れてくださったように…受け入れ合いなさい」１５：７